

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720173

研究課題名(和文)ベルギーの「方言」復権運動における標準語についての研究

研究課題名(英文)The Standard Languages in Revival Movements of "Dialects" in Belgium

## 研究代表者

石部 尚登 (ISHIBE, Naoto)

日本大学・理工学部・助教

研究者番号：70579127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ベルギーにおける「方言」の復権運動には、復権の目標の違いに起因する標準語の形態に対する立場の違いが存在するものの、教育への導入の目標、ICTを利用した活動、さらには公用語政策の影響により、他の地域語・少数言語の復権と同様に「標準語」の必要性が立場の違いを超えて共有されていることを明らかにした。ただし、そこで志向される「標準語」とは、他の地域語・少数言語の復権の場合とは異なり、複数の中心を持つことが可能な、より柔軟かつ寛容な形態であることを示した。

研究成果の概要(英文)：We clarified that even though activists and organizations engaging in the revival movement of "dialects" in Belgium have considerable disagreement about the form of "standard language", they share, as is the case in other movements for regional and minority languages, the perception that having a standard is essential for a further advance of the movement. It is aimed for introduction of dialects to education and activities through use of ICTs, and is also under the influence of policies for official languages. However, in contrast to other movements for regional and minority languages, the "standard" intended in the movements for dialect is one that can be multicentric, flexible and permissive.

研究分野：社会言語学

キーワード：ベルギー ワロン語 標準語 復権運動 方言 正書法

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、言語多様性の保全が現代社会における喫緊の課題として語られ、少数言語や地域語、危機言語の復権へ向けた動きが盛んになっている。同時に、言語(的人)権や言語政策、複言語主義に関する研究など、そうした動きを理論的に支える研究も国内外問わず盛んに行われている。その一方で、ある言語の内的な変異とされる「方言」の復権は、研究と実践の双方において、切実な問題と捉えられていない現状がある。

(2) ベルギー南部のフランス語圏に話者領域を持つワロン語などの「方言」の復権運動もこうしたカテゴリに含まれる。1990年には法律によって、公用語のフランス語とは別の「言語」として承認され、その保護と促進が明言されるなど、いわば「上からの」環境整備は進んだ。しかし、「下から」の動きは分裂傾向にあり大きな推進力とはなりえていない状況にある。結果として、これら諸「方言」は、ユネスコの定義では「危機言語」に分類されている状況にある。

## 2. 研究の目的

(1) そこで本研究では、復権運動の進展をばむひとつの要因として、それぞれの運動団体が復権を望むことばの「標準語」の在り方に着目して、各団体の標準語観の異同、およびそれが運動の進展に及ぼしている影響を明らかにすることを目的とする。運動を実質的なものとして展開していくためには、運動に直接主体的に携わる運動家の尽力のみならず、間接的に、または消極的に運動に関連している人々の認識も影響力を持つ。そこで本研究では調査の対象を一般の人々にまで広く設定する。

(2) 具体的な研究課題は以下の二点となる。

「方言復権運動において標準語を設定する意味と問題点を明らかにする」

19世紀以降、西洋で近代国民国家が出現し、単一の「国語」を通じた「国民」の統合が進められていく過程で、言語はそれを話す人々の紐帯、集団の境界線として意識されるようになった。その後の中・東欧における新国家の独立や20世紀の植民地からの解放運動、また1970年代以降に盛り上がりを見せ一定の成果を残してきたヨーロッパにおける地域語・少数言語の復権運動など、これらの運動では「自らの言語」の存在は運動の中心を占めていた。こうした諸運動と方言復権運動の間の言語の役割に関する異同を明らかにする。

「一般の人々が方言の標準語化について抱いている意識を明らかにする」

言語の復権の成否にとって、その言語に対する話し手の意識は重要な要素である。従来の地域語や少数言語の復権運動についての研

究では、標準語は政治上または運動上の問題とされ、運動家や政治家の持つ言語意識が中心に分析されてきた。そこで本研究では、実際にその方言を話す、または話すようになることが期待されている一般の人々が、運動を進展させるうえで要請される方言の標準化に対してどのような意識を持っているかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) まず、これまでの研究から引き続き使用している枠組み(「内発的地域語評議会」、「ワロン語文学協会」、「ワロン文化協会」、「大小様々な運動団体」)を活用する運動に携わる各組織、団体が発行している資料(雑誌、パンフレット、報告書など)の分析を通して、それぞれの各組織、団体ごとの標準語観を把握するための基礎データを得る。その後、先の資料の分析により得られた情報を基に、各組織、団体の代表者に対して共通の聞き取り項目を準備し、聞き取り調査を実施する。また、一般の人々への聞き取り同時に行うことで、方言話者(またはかつての方言話者)の標準語観についてのデータを得る。

(2) また、上記の活動と同時に、ベルギーの運動以外のヨーロッパ各地における地域語・少数言語の復権運動や、現在の活動だけではない過去に言語を基軸として世界各地で展開された代表的な言語運動の活動についての情報を収集し、言語運動一般における「標準語」の役割についての知見を整理し、これをベルギーの「方言」の復権運動における状況と比較する。

(3) 最終的に上記(1)と(2)の情報を合わせて分析を行い、またさらなる聞き取り調査、補足の現地調査を行い成果の統合を行う。

## 4. 研究成果

(1) 研究期間中、2012年8月16日~9月4日、2013年9月5日~9月10日、2014年9月12日~9月18日にベルギーに滞在し、ベルギー王立図書館やブリュッセル自由大学等の大学図書館、ワロン生活博物館での関連文献資料の収集、聞き取り活動等の現地調査を行った。さらに資料の分析を通して、先述の2つの研究課題について、それぞれ以下のことを明らかにした。

(2) 方言復権運動において標準語を設定する意味と問題に関しては、まず、ヨーロッパの各地で行われている少数言語の復権運動や言語ナショナリズムに基づく世界各地での言語運動との比較を通して、本研究の対象であるワロン語のような伝統的に「方言」としての認識が強いことばの復権においても、同様に「標準語」の存在が運動の基盤として必須のものとして捉えられていることを明らかにした。

さらに、そうした「標準語」の必要性は、運動の近代化に伴い不可避免的に高まってきている現状が確認できた。言語の復権において、学校教育で「教えられる」ということが復権へ向けた決定的な切り札となることは、「方言」の復権でもかわりはない。教育現場への導入形態については多様な意見が共存ししつつも、運動家たちは多かれ少なかれそれを希望している状況が観察された。しかしながら、いざ実現の段となると、共通の教材という課題が不可避免的に生じ、「方言」の存在理由である「多様性」との間に葛藤を生じさせているという問題点を示した。

また、「方言」としての認識の根強さ故に公的な地位の付与が難しいことばの運動にとって、近年、ITC を活用した活動がきわめておおきな意味を持つようになってきている。それにより、旧来型の請願を行い、諸決定機関の決定を待つといった受動的な運動形態から、自らが積極的に発信する能動的な運動形態への転換を可能にしている。とはいえ、そうした ICT を用いた活動自体が、ことばのさらなる標準化を一方では要請し、促進している状況を明らかにした。

さらに、ベルギー国家が独立以来の長きにわたって経験してきたオランダ語とフランス語間の言語対立、くわえてその対立解消のため妥協案として導入された領域性の原理に基づく極めて厳格な「地域別一言語主義」の伝統が、言語は明確な領域を画定できる単一の標準語を持つべきであるとする言語観を強固なものとしていること、そしてそれが「方言」の復権運動家にも影響を及ぼしていることを確認した。すなわち、ベルギー特有の制限として、「方言」を公用語と同等の言語として主張していこうとすれば、「標準語」の存在は不可欠であるとする強い圧力が存在することを示した。

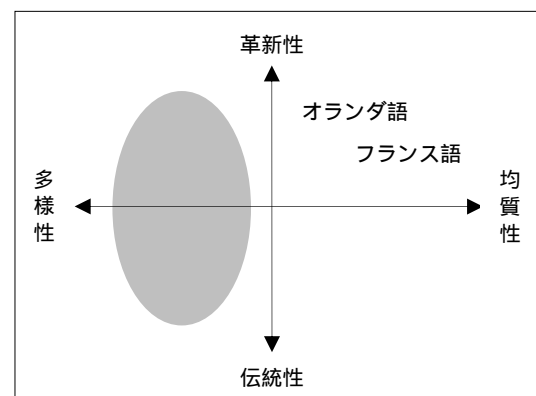
なお上記の点に関連して、国外の「言語的中心地」(フランス語にとってのフランス共和国、オランダ語にとってのオランダ王国)や関連する地域(カナダのケベック)の政策が、ベルギー国内の公用語政策(標準語の普及・非標準語の排斥)を経由する形で、「方言」の復権運動にも影響を及ぼしていることも明らかになった。

(3) 以上のような情報化の進む現代社会における外的条件、またベルギーという国家での運動に起因する特有の条件を別にすれば、「標準語」の必要性の認識については運動を行う各団体間でおおむね共有されてはいる。しかしその一方で、それが具体的にどのような形態をとりうる(べき)か(コーパス計画)については意見の違いが生じていることも明らかになった。これは主として、どのよう

な形態での復権を望むのか(ステータス計画)についての団体ごとの見解の違いに由来するものである。ただしそれでも、言語領域を通じた均質的な標準語というのではなく、複数の中心を有するより柔軟・寛容な標準語が志向されるという点ではやはり共通性が見られた。他の言語運動とは異なる「方言」の復権に携わる人々の標準語観の特徴のひとつとして提示することができた。

(4) 以上を簡略にまとめると、「方言」の復権運動における標準語観は、公用語政策で見られるそれとの対比で、以下のような構図で複数の象限にわたる多元的なものであると把握することが可能となる。

図: 言語運動・政策における標準語観



(5) なお、方言の復権運動における標準語の問題を考察していく過程で、文学活動の継続、辞書や文法書の刊行などを通して、各個人が当初は意図していなかった正書法の固定という標準化が生じることが明らかになった。こうしたいわば公権力の存在を前提としない標準化の在り方は、一般の人々の標準語観とも関連する問題であるとともに、本研究における派生的な成果である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

ISHIBE Naoto, Le régime de territorialité linguistique et les langues non-officielles en Belgique, M. Carme Junyent (Ed.) *La territorialitat lingüística*, Ed. Horsori Barcelona, 査読無、2015(予定)

石部尚登、医療現場における方言の「やさしさ」、義永美央子・山下仁編、ことばの「やさしさ」とは何か 批判的社会言語学からのアプローチ、三元社、査読無、2015、105-123

石部尚登、フラインデレンおよびワロニ

ーにおけるケベックの言語政策の影響、ケベック研究、査読無、6、2014、99-109

石部尚登、言語運動、国立民族学博物館編、世界民族百科事典、丸善出版、査読無、2014、168-9

柿原武史、石部尚登、ICTとヨーロッパの少数言語、ことばと社会、査読有、15、2014、63-85

石部尚登、ワロン語の標準化 方言学者と復権運動家の同床異夢、岩本和子・石部尚登編、「ベルギー」とは何か？ アイデンティティの多層性、松籟社、査読無、2013、41-61

〔学会発表〕(計7件)

石部尚登、ベルギーにおける言語規範の輸入と輸出、第59回研究会ブリュッセル国際大会、2015.3.4、神戸大学ブリュッセルオフィス(ベルギー)

石部尚登、「方言」の書記化 ワロン語正書法の歴史から、第57回ベルギー研究会ルクセンブルク学研究会=ベルギー研究会共同セミナー、2014.11.9、西宮市大学交流センター(兵庫県・西宮市)

石部尚登、公的権力の存在を前提としない「事実上の正書法」の固定化、第52回研究会ブリュッセル国際大会、2014.3.5、神戸大学ブリュッセルオフィス(ベルギー)

ISHIBE Naoto, Le régime de territorialité linguistique et les langues non-officielles en Belgique, Journada La territorialitat lingüística, 2014.2.21、バルセロナ大学(スペイン)

石部尚登、フラーンデレンおよびワロニーにおけるケベックの言語政策の影響、日本ケベック学会 2013 年度全国大会、2013.10.12、関西学院大学(兵庫県・西宮市)

石部尚登、「方言」の復権と ICT の活用、多言語社会研究会第7回研究大会、2012.12.2、女子美術大学(東京都・杉並区)

石部尚登、ワロン語の標準化 方言学者と復権運動家の同床異夢、第39回関西ベルギー研究会、2012.7.29、西宮市大学交流センター(兵庫県・西宮市)

〔図書〕(計1件)

岩本和子編、石部尚登編、松籟社、「ベルギー」とは何か？ アイデンティティの多層性、2013、295

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石部 尚登 (ISHIBE, Naoto)

日本大学・理工学部・助教

研究者番号：70579127